

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00616

研究課題名（和文）甲骨文字や金文などの統計分析に基づく漢字の造字理論研究

研究課題名（英文）Research on the theory of making Chinese characters based on statistical analysis of oracle bone scripts and Chinese bronze inscriptions

研究代表者

落合 淳思 (Ochiai, Atsushi)

立命館大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：20449531

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、漢字の造字理論と字形構造の意義について分析をおこなった。造字理論については、漢字の持つ三つの要素である字形・字音・字義の各面から分析したことが本研究の特徴である。字形構造の意義については、字典である『漢字字形史字典【教育漢字対応版】』に集成した。古代における漢字の成り立ちを字形の歴史とともに分析したが、その際には字音や字義も考慮しており、従来の研究に比べて総合的な分析になっている。そのほか、漢語の発音や日本の音読みに関する情報などを概説し、上古音に関する自説を述べた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

それぞれの漢字には字形・字音・字義の三つの要素がある。従来は、字形は文字学、字音は音韻学・言語学、字義は歴史学・文学という形で個別に研究されることが多かった。そのため、三者の情報が必要な字源研究においては必ず何らかの偏りが生じていた。これに対し、本研究は字形・字音・字義を統合しており、偏りの少ない分析になっている。また字音表示の時代的分析もおこなった。単純化して言えば、漢字は具象的な文字体系から抽象的な文字体系へと変化した過程で均衡化した文字体系であり、具象と抽象が混在していることが特徴である。そのほか、本研究が提示した字音と字形史の情報は、国語教育や書道研究に役立つことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the theory of making Chinese characters and the significance of the glyphic structure.

About the theory of making Chinese characters, the feature of this research is analyzing from each aspect of character shape, character sound, and character meaning, which are the three elements of Chinese characters. About the significance of the glyphic structure, it collected in the dictionary "Kan-ji ji-kei-shi ji-ten [Kyo-iku kan-ji compatible version]". This study analyzed the origin of Chinese characters in ancient times and the history of glyphs. At that time, character sound and character meaning are also taken into consideration, and the analysis is more comprehensive than in conventional research.

In addition, this study outlined information on pronunciation of Chinese and Japanese on-yomi, and stated own theory about old Chinese phonology.

研究分野：東洋史・漢字史

キーワード：漢字 造字理論 甲骨文字 金文 簡牘文字 字形史

1. 研究開始当初の背景

漢字の造字法（成り立ち）については、時代ごとに傾向の相違がある。これは従来から漠然と認識されていたものの、具体的な経緯や比率は明らかにされていなかった。

漢字には、字形（文字の形）・字音（文字の発音）・字義（文字の意味）という3つの要素がある。本研究は、これら3要素に対し、造字の経緯や字形構造の比率から、各時代における漢字の造字に対する認識を明らかにすることを計画していた。

2. 研究の目的

しかし、調査を始めてみると、そもそも漢字の分類自体がこれまで曖昧であったことが判明した。字音については、ある程度、明確にされていたが、字形・字義については分類の段階から始めなければならなかった。結果として、研究目的にも変更が必要になった。

具体的には、字音については時代的な変化・比率を求めることが可能であり、当初の計画通りに進めることができた。一方、字形・字義については、造字における定義を明確にし、そのうえで多くの文字の字形・字義や造字法を調査した。比率については、引き続き次年度以降の科研費課題の一部としている。

3. 研究の方法

字形・字義については、前述のように、まず造字法の分類の段階から始めた。2019年の口頭発表である「漢字の造字に関する分類について」と「亦声の出現過程について」を踏まえて、すべての漢字の字形構造を分析可能にする形で分類をおこなった。これが「漢字の成り立ちと用字法に関する分類」である（後述①）。

また、より多くの字形の歴史を集成するという作業も行っており、それをまとめたのが『漢字字形史字典【教育漢字対応版】』である（後述②）。またその成果の一部は「字形的変遷—从甲骨文到楷书」においても発表している。

字音については、まず各時代の字形から字音要素の有無を統計し、時代的な変化を示した。口頭発表の「漢字の造字に関する分類について」において最初に提示し、著書である『漢字の音』では母集団の文字数を増やして掲載した（後述③）。

また、殷代の甲骨文字と秦代の篆書の韻母を比較することで、より古い時代の漢語の韻母体系の推定も行った。甲骨文字のデータはすでに2018年の口頭発表である「甲骨文字の特殊性」（アジア・アフリカ言語文化研究所「アジア文字研究基盤の構築1：文字学に関する用語・概念の研究」共同利用・共同研究課題研究会）において提示しており、それを利用して『漢字の音』に推定される韻母体系を掲載した（後述④）。

そのほか、上古漢語の複声母説に対する批判も行っており、口頭で「上古漢語の複声母説と漢字の構造について」として発表した。それに加筆したものは『漢字の音』にも掲載している（後述⑤）。

4. 研究成果

まず①造字法の分類であるが、結論としては次表のように提示した（「漢字の成り立ちと用字法に関する分類」67頁）。

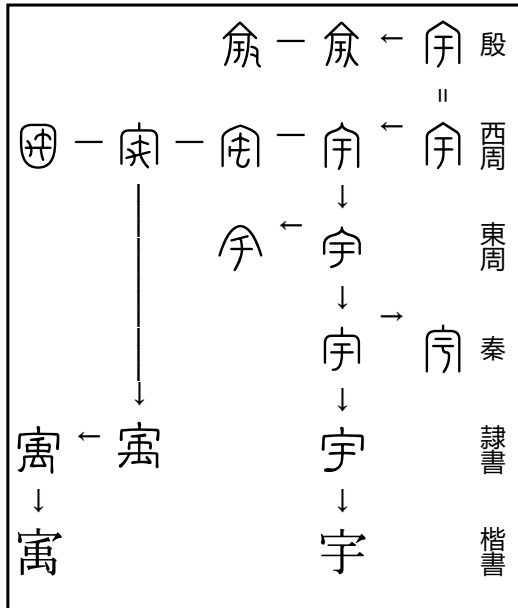
		本稿	許慎	唐蘭	赤塚忠	
表記法	作字法*	象形	象形	象形	象形	
		指	单体指事*	指事		指事
		事	合体指事*	从A B	象意	象形指事等
			会	視覚会意*		
		意	意味会意*	从A从B		会意
			会意亦声	亦声	×	会意形声
		形声	形声亦声	×	形声	
	形声		形声	形声		
	用字法	借音*		仮借？	象声	仮借
		借義*		転注？	引伸	×
借形*			×	×	×	

「*」はこれまで定義が明確にされていなかったものを新たに定義したもの、および呼称として適切でなかったものを改めたものである。「許慎」「唐蘭」「赤塚忠」はそれぞれ『説文解字』（大徐本）、唐蘭『古文字学導論』、『角川新字源』の分類であり、「×」の部分に定義・分類として漏れていたものである。

この方法は網羅的であり、従来の研究で分類できなかった文字や曖昧だった概念についても分類を可能にする。同時に、字形・字音・字義の要素から機械的に分類できることが特徴であり、より客観的になっている。

なお、①は文字単位での分類研究であるが、漢字の構成要素の分類については、2021年に「漢字における「形符」という概念について」として口頭発表しており、詳細は2022年度に公刊する予定である。

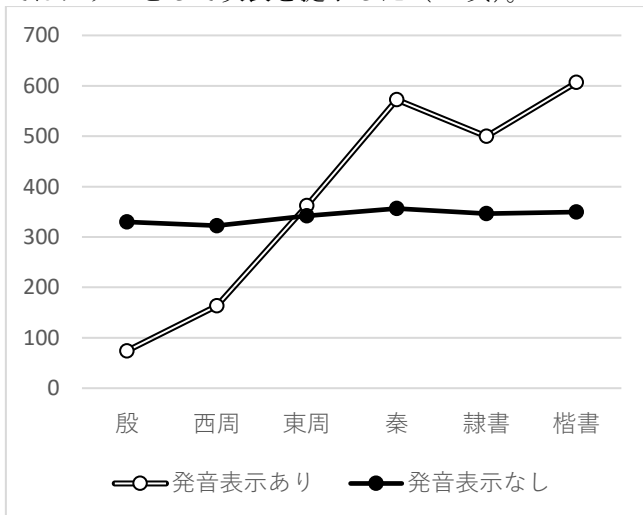
②字形の歴史の集成については、各時代の出土文字資料から網羅的に字形を抽出し、その継承関係を推定して表にした。『漢字字形史字典【教育漢字対応版】』では、現代日本の教育漢字とその同源字を対象としており、1271字の字形を取り上げた。次表はその一例である。



字形が変化する場合、単に線の向きや本数などが変わるだけではなく、文字の一部が別の構成要素に置換される場合もある。その際には、字形・字音・字義および字源のいずれかの類似点によって置換される。この表でも、「宀」「宀」「宀」「宀」などは構造が変化していないが、「宀」「宀」「宀」などは発音を表す「于」が類似音の「禹」になっており、字音による置換である。

なお、構成要素の置換に関する統計的な分析については、次年度以降に行う予定である。

③漢字の字音要素の有無とその時代的变化については、すべての文字を対象とすることは困難であるため、教育漢字とその同源字に限定して統計した。正確な数値とまでは言えないものの、1200字以上の文字を対象としており、傾向を把握するためには十分な母数である。『漢字の音』ではグラフとして次表を提示した（58頁）。



殷代（後期。紀元前13～11世紀）には、形声文字など発音表示を含む文字はごく少なかった

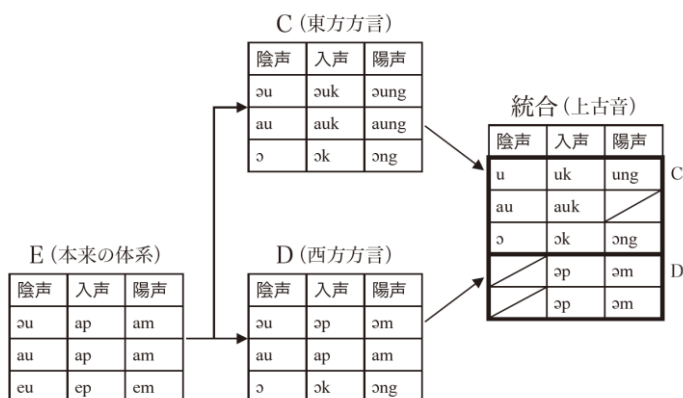
のであるが、西周代（紀元前 11～8 世紀）以降に増加している。ただし、楷書においても発音表示を含まない文字は多く、具象的表現から抽象的表現への過渡期で均衡化したということが言える。

従来の研究には、漢字の成り立ちについて過剰に字音を重視する説や、逆に字形だけから分析する説などもあったが、いずれも極論であり、字形・字音・字義をすべて考慮することが必要である。

なお、グラフでは「隸書（後漢代の八分隸書）」の「発音表示あり」が減少しているように見えるが、これは秦代（紀元前 3 世紀）の文字資料として『説文解字』記載の小篆を加えたためである。より正確な分析をするためには、文献資料である『説文解字』の情報は除くべきであろうが、これまでの古文字学が『説文解字』を基準としていたため、本研究でも小篆を含めて統計した。もし『説文解字』の小篆を除くと、グラフはより滑らかな折れ線になる。

④より古い時代の漢語の韻母体系について、上古音が不規則になっている部分は、次表のように推定される（『漢字の音』192 頁）。

表6-3 推定される東西の方言差(C・D・Eの部分のみ)



従来は、『説文解字』等に記載された「冬部 (ung)」の文字数が少ないため、これが新しく出現したと考えられていた。しかし、実際に統計したところ、むしろ甲骨文字の段階では比較的比率が高く、後代に減少していた。つまり、「新しく出現したから」ではなく、「新しく作られにくかった」ことが比率の低下を招いたと推定できた。

それに基づき、殷代の字音傾向を東方言、周代の字音傾向を西方方言と仮定して推定したのが前掲表である。より古い時代には、対称性の高い発音体系であり、後に東西の方言を統合したため、不規則な非対称性が出現したと考えられる。

⑤形声文字とその音符（発音を表す部分）については、声母が類似しないことがある。そのため、西洋の言語学者を中心として、上古音に複声母（二重声母）を想定し、それが中古音までに分裂したと推定する研究者が多い。

しかし、実際には、i 方言の流入、ii 意味を重視した亦声、iii 引伸義や転注による一字二音、iv 起源が違う形が偶然に近くなったものなどがある。西洋の言語学者は漢字の成り立ちや字形構造を理解しないまま字音のみで分析したため、上古音を複雑な体系として復元することになった。漢字においては、字音の研究であっても字形や字源の知識が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 落合淳思	4. 巻 2
2. 論文標題 漢字の成り立ちと用字法に関する分類	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本漢字学会報	6. 最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合淳思	4. 巻 4
2. 論文標題 形音義による漢字の構成要素の分類	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本漢字学会報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 落合淳思
2. 発表標題 上古漢語の複声母説と漢字の構造について
3. 学会等名 アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築(2) 文字学に関する既存術語の再検討」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 落合淳思
2. 発表標題 漢字の造字に関する分類について
3. 学会等名 アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築1：文字学に関する用語・概念の研究」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 落合淳思
2. 発表標題 字形的変遷 從甲骨文到楷書
3. 学会等名 世界漢字学会（第7届）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 落合淳思
2. 発表標題 漢字における形声とその周辺の概念について
3. 学会等名 「アジア文字研究基盤の構築(2) 文字学に関する既存術語の再検討」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 落合淳思
2. 発表標題 漢字における「形符」という概念について
3. 学会等名 「アジア文字研究基盤の構築(2) 文字学に関する既存術語の再検討」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 落合淳思
2. 発表標題 亦声の出現過程について
3. 学会等名 漢字学研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 落合 淳思	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 320
3. 書名 漢字の構造	

1. 著者名 落合淳思	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 248
3. 書名 漢字の音	

1. 著者名 落合淳思	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 1216
3. 書名 漢字字形史字典【教育漢字対応版】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

甲骨文字全文検索データベース
<http://koukotsu.sakura.ne.jp/top.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	佐藤 信弥 (Sato Shinya) (10768162)	大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・客員研究員 (24403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関